


在外研究員研究報告書

2017年6月2日 受付

所 属	GS研究科		氏 名	峯 陽一 
職 名	教授			
研究課題名	東アジアとアフリカにおける人間の安全保障			
研究期間	2016年4月1日～2016年9月30日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2016年4月1日～9月30日(下記 ジンバブエ滞在機関を除く) 2016年7月4日～8日 2016年9月2日～4日	南アフリカ共和国 ジンバブエ	ステレンボッシュ大学・ケープタウン大学 アフリカ農業研究所	
研 究 費	万円	研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.	発行年月日	
	別紙の通り			
	著 書 名	発 行 所 名	発行年月日	
	別紙の通り			
	演 題	講演学会名	講演年月日	
	別紙の通り			

在外研究中に実施した研究の直接の成果は以下の通り。

【編著】

Scarlett Cornelissen and Yoichi Mine, *Afro-Asia Entanglements: Migration and Agency in a Globalising World*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

※ステレンボッシュで実施した国際会議の成果。2017年6月末にパルグレイブに原稿提出、年度内に出版予定。

【論文】

“Dreaming Afrasia: An Essay on Afro-Asian International Relations in Space-Time Perspectives” in Pedro Amagasa, David Arase and Scarlett Cornelissen eds. *Routledge Handbook of Afro-Asian Relations*, London: Routledge.

※2017年9月に出版予定。

“How Nations Resurge?: Overcoming Historical Inequalities in South Africa”,

※下記の通り、口頭発表。2017年度内に GRIPS 新領域科研の最終成果の英語書籍の一部として出版予定。

【翻訳・書評・エッセイ】

エステル・デュフロ著『貧困と闘う知』みすず書房、2017年2月（アリーン・コザと共訳）、全207頁。

「訳者解説」（上記『貧困と闘う知』、183-197頁）。

※ステレンボッシュ・ケープタウン滞在中に取り組み、完成させた翻訳。

“Sangmin Bae and Makoto Maruyama eds, *Human Security, Changing States and Global Responses: Institutions and Practices*, Abingdon: Routledge, 2015”, *The Developing Economies*, Volume 54, Number 4, December 2016, pp. 316-320 (Book Review).

※ステレンボッシュ・ケープタウン滞在中に執筆。

「ハワード・W・フレンチ著（栗原泉訳）『中国第二の大陸アフリカー100万の移民が築く新たな帝国』白水社」『日本経済新聞』2016年5月1日（書評）。

※ステレンボッシュ滞在中に執筆。

「機能する民主主義－南アフリカの「2016 地方選挙」をめぐって」新興国の政治と経済発展の相互作用パターンの解明－GRIPS 新領域科研ホームページ掲載コラム、2016年8月22日。 <http://www3.grips.ac.jp/~esp/>

※ケープタウン滞在中に執筆。下記に前文掲載。

「ダヨ・オロパデ著（松本裕訳）『アフリカ希望の大陸』英治出版』『日本経済新聞』2016年11月6日（書評）。

※ケープタウン滞在中に執筆。

【口頭発表】

“Preventing Violent Conflict in Africa”, Friday Seminar, Department of Political Science, University of Stellenbosch, South Africa, 29 July, 2016.

※ステレンボッシュ大学で実施したセミナー発表。

“Chain of Voices: Black Consciousness and Social Movements in Japan, ca. 1970”, Unit for Humanities at Rhodes University (uhuru), South Africa, 10 August, 2016.

※ローズ大学で実施したセミナー発表。

“Dreaming Afrasia: Afro-Asian Relationship in the 21st Century”, Institute for Humanities in Africa (huma), University of Cape Town, South Africa, 13 September, 2016.

※ケープタウン大学で実施したセミナー発表。

“How Nations Resurge?: Overcoming Historical Inequalities in South Africa”, The 9th Seminar of ESP Political Economy Group (C01), National Graduate Institute for Policy Studies (GRIPS), 10 March, 2017.

※南アフリカ滞在中に行った研究成果論文の概要を発表。論文ドラフトは最終出版物の編者の恒川恵一教授（GRIPS）に提出済み。本年度内に出版予定。

以上の通り、今回の在外研究中の取り組みの成果は、2017年度に刊行予定のものも含めて、編著が1本、学術論文が2本、翻訳が1本、書評等が5本、口頭発表が4本となった。

南アフリカとの学術協力の展望（在外研究の記録）

在学研究の最初の滞在地は、ワインで有名な南アフリカ共和国のステレンボッシュである。筆者は1998年から2000年まで国際交流基金の日本研究促進事業で同大学に滞在し、政治学科の専任准教授として教鞭を執っていた。月に一度の教授会にも参加したのだが、大学改革をめぐる綱引きや教員の人間関係は世界中どこでも同じだということがわかって、とても興味深かったことを覚えている。

今回は2016年4月からの滞在である。前回は小学生の娘と幼稚園児の息子を連れていたが、今では娘は一人前の援助機関職員としてガーナで働いており、息子はフランスで美大生。今回は妻と二人で久しぶりの南アフリカ生活を満喫するつもりだったが、筆者が一足先にステレンボッシュでアパートの準備をしていたところで実家の熊本が地震に見舞われ、妻が対応することになった。隣家は半壊だったが、幸いに実家には大きな被害がなく、80歳

の両親には「大丈夫だから、アフリカで仕事をしてこい」と諭された。スカイプで互いの様子がわかるので安心である。一時帰国だけで在外研究を継続した。

ステレンボッシュに滞在中は、日本学術振興会および南アフリカ国立研究財団の支援を受けて、プリンストンを範とするステレンボッシュ高等研究所 (STIAS) でアフリカとアジアの地域間移民に関するシンポジウムを開催した。ステレンボッシュ大学のスカーレット・コーネリッセン教授との共著で、成果はパルグレイブから今年度中に出版予定である。滞在中は同大学の政治学科でアフリカの紛争予防に関する講演を行い、同大学から Professor Extraordinaire に任命された。これまで 20 年にわたって同大学の研究者たちと共同研究を積み重ねてきたことを評価していただいたわけで、感慨深かった。7 月からはケープタウン大学に移動し、アフリカ人文学研究所 (HUMA) で研究活動を継続した。アフリカ・アジア国際関係に関するセミナー報告を行い、同大学アフリカ研究センターと日本アフリカ学会の関係機関の交流を橋渡しするなど、大きな成果があった。ところが、途中で学生自治会が学費値上阻止闘争を開始したため、筆者を含めて教職員はすべてキャンパスからロックアウトされることになった。学生集会に潜入して活動家の話を聴くなど、思いがけない参与観察ができた。貧困家庭出身の学生の困窮は切実である。ケープタウン大学の研究室には物理的に通えなくなったが、だからといって研究を中断するわけにはいかない。ケープタウンの南アフリカ紛争解決研究所で日本・南アフリカ関係の研究報告を行ったり (成果は今年度中に出版予定)、東ケープ州の農村に飛んでトランスカイ地方の畜産業の現地調査を行ったり、同州のローズ大学で黒人意識に関するセミナー報告を実施したり、隣国ジンバブエに飛んで土地問題の調査を実施するなど、忙しい日々が続いた。

南アフリカの首都プレトリアでは廣木重之特命全権大使より公邸にお招きいただき、将来の日本と南アフリカの学術交流について貴重な意見交換の機会を得ることができた。プレトリア大学には国際協力機構 (JICA) の支援を受けて日本研究センターが設置されており、同大学のシェリル・ドラレイ学長、および同センター長のシシル・ハーテル教授はすでに同志社大学を訪問し、今後の連携に意欲を見せておられる。今回はプレトリア大学博物館をご案内いただき、南部アフリカと東アジアの古代の文化交流に関する貴重なコレクションを見せていただいた。今後の交流の進展が楽しみである。

GRIPS 新領域科研のホームページに掲載したエッセイ

<http://www3.grips.ac.jp/~esp/%E6%9C%AA%E5%88%86%E9%A1%9E/%E6%A9%9F%E8%83%BD%E3%81%99%E3%82%8B%E6%B0%91%E4%B8%BB%E4%B8%BB%E7%BE%A9-%EF%BC%8D-%E5%8D%97%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%AA%E3%82%AB%E3%81%AE%E3%80%8C2016%E5%9C%B0%E6%96%B9%E9%81%B8%E6%8C%99%E3%80%8D/>

機能する民主主義 — 南アフリカの「2016 地方選挙」をめぐって

▲ 陽一 (同志社大学) <選挙政治の定着>

8月3日、南アフリカ共和国で一斉に地方自治体選挙が行われた。大小 200 の政党に所属する 6 万人を超える候補者が、総計 8640 議席を争った。スタジアムや集会場で無数の集会が行われ、新聞やテレビは繰り返し特集を組み、各政党の活動家は有権者宅をさかんに戸別訪問し、携帯電話には投票を訴える SMS が届く。筆者はたまたまケープタウン大学の客員教授として当地に滞在しているのだが、宿舎の真向かいの高校が投票所になっており、朝 7 時から夜 7 時まで様々な人々が一票を投じにくるのを観察できた。好みの政党の T シャツやスカーフを身につけた若者たちも目立った。

南アフリカは、新興国グループ BRICS の有力な一角を占める。同国の住民の多数派の黒人たちは、肌の色だけを理由として市民権を奪われてきた。1994 年にアパルトヘイト (人種隔離体制) に別れを告げた同国において、全国民を包含する民主主義が定着し、自由で公正な選挙が日常の光景になったことは、本当に感慨深い。2016 年の今、ここでは選挙ボイコットも軍事クーデターもありえないのだ。 <主要なアクター>

議席の大部分を争った 3 つの主要政党について、簡単に説明しておこう。与党のアフリカ民族会議 (ANC) は、1912 年設立のアフリカで最も歴史が長い民族解放運動である。獄中で ANC の精神的支柱となったネルソン・マンデラ大統領が退いた後、タボ・ムベキ大統領は市場経済重視の政権運営を行ったが失脚し、2009 年には共産党と労働組合の支持を受けたジェイコブ・ズマが大統領に就任した。しかし、ズマは数々の汚職やスキャンダルに見舞われ、在任中は経済成長も低迷している。選挙準備期間には、地方選挙の候補者を含む ANC 活動家が組織内の路線対立がらみで殺害される事件も相次ぎ、緊張が走った。ただし、人口の 8 割近くを占める黒人のなかで最も人気が高い政党であることに変わりはない。シンボルカラーは黄色。

最大野党の民主連合 (DA) は、アパルトヘイトに反対していたイギリス系白人のリベラル政党が起源だが、アパルトヘイト体制の恩恵を受けていた白人有権者全体を支持基盤に取り込み、続けてカラード (いわゆる混血の社会層) の支持を固めた。しかし、白人とカラードはあわせても人口の 2 割にすぎないので、多数派の黒人に食い込むことが政党としての

成熟の鍵である。2015年、黒人のムシ・マイマネが党首に就任した。シンボルカラーは青色。

さらに第三極として、もともと ANC 青年同盟議長だったジュリアス・マレマが率いる経済自由戦士 (EFF) が頭角を現している。鉱山の国有化や大胆な土地改革などを唱えてズマ政権を左から攻撃したマレマは、2012年に ANC を除名され、翌年に EFF を結成した。支持基盤は ANC と競合しており、ANC 内部の反ズマ勢力と連携している。今回の投票の前日、マレマはムベキ元大統領と会談した。ブルキナファソの革命家トマ・サンカラ風のスタイルで、シンボルカラーは赤色。

与党 ANC の支持基盤を、DA が右 (市場経済の重視) から、EFF が左 (政府介入の強化) から侵食する構図が鮮明になっている。アパルトヘイト撤廃から 20 年が過ぎた今、これまで一貫して 3 分の 2 前後の議席を独占してきた ANC への支持が、過半数を割り込むことになるのだろうか。2019 年には国会議員・州議会議員選挙が行われるので、今年の地方選挙はその前哨戦としても大きな注目を集めた。歴史的正当性を有する南アフリカの民族解放運動が下野するとしたら、アフリカ政治全体に与える影響も甚大である。

<選挙結果>

では、選挙結果を見てみよう。地方選挙は選挙区制と比例代表制の組み合わせであるが、各政党の議席は全体として得票率に比例するように調整される。3 日間にわたる開票作業の結果、政党別の全国得票率は、ANC が 53.9%、DA が 26.9%、EFF が 8.2% となった (前回 5 年前の 2011 年の地方選挙では ANC が 62.0%、DA が 24.0% で、当時は EFF は存在していなかった)。

地域別に細かく分析すると興味深いことが見えてくるのだが、ここでは大きく二つのことを指摘しておきたい。第一は、過去の選挙との連続性である。ANC は 62% から 54% へと得票を大きく減らしたが、ANC から飛び出した EFF の得票を合わせると 62% のままで、シェアは前回選挙と同一である。DA は確かに勢力を伸ばしているが、全国規模で見ると、支持基盤の 3% の拡大を地滑りの勝利とまで呼ぶのは誇張だろう。南アフリカの選挙は「人種別センサス」と言われることがあるが、今回の選挙でも、ANC や EFF に投票した白人はほとんどおらず、DA に投票した黒人も (全国的に見ると) 多くはなかった。この構図は今回も継続している。

第二は、連続性のなかの変化である。与党 ANC に対する不満が強く、DA の主要な支持基盤である白人とカラードの存在感が強い場所では、ANC の得票は過半数を大きく割り込み、

DA が第一党の座を確保することになった。この現象が顕著に見られたのが大都市圏である。DA の得票率は、港湾都市ケープタウンで 66.6%、港湾都市ポートエリザベスを含むネルソン・マンデラ・ベイで 46.7%、首都プレトリアを含むツワネで 43.1%となり、それぞれの都市で ANC を抜いて第一党となった。南アフリカ最大の都市ジョハネスバーグでも、ANC の 44.6%に対して DA は 38.3%と迫った。無敵の強さを誇っていた ANC が南アフリカを象徴する大都市の多くで過半数を失うという事態は、衝撃的であった。

＜都市部の反ANC＞

都市部におけるこの ANC の敗北を、どのように解釈したらよいのだろうか。理由は、都市空間の特徴そのものに求められるだろう。大都市においては、黒人も白人も日々大量の情報にさらされており、コミュニケーションのチャンネルも多様である。成長する黒人中産階級は、白人市民と価値観を共有する面があると同時に、資源の再分配をめぐる白人たちと競合する機会も多い。他方、都市部の黒人貧困層は、高級車を乗り回すようになった黒人の同胞たち（多くは ANC 関係の人脈で高給のポストを手に入れた人々である）を日常的に目の当たりにし、不条理な格差を実感する。さらに、ANC 政府のもとで公共サービスの提供は必ずしも順調でなく、失業率もまた、全国で 27% (職を探す意欲を失った者を入れれば 36%) に達している。社会関係資本は切り裂かれ、治安の悪化も深刻である。

アパルトヘイトが撤廃されて、何が変わったというのか。与党 ANC は「よりよい生活」の到来を約束したのではなかったか。富裕層と貧民とでは怒りの対象が違うが、双方ともに現状への欲求不満が蓄積している。こうして、都市の「怒れる黒人たち」の一定の部分が、あえて EFF や DA に一票を投じることで、ANC を処罰することになったわけである。その一方、農村地帯や地方都市においては、EFF や小政党に多少の議席を奪われつつも、ANC が過半数の議席を確保した自治体が多かった。村の秩序、拡大家族、ボス政治と政党組織のネットワークが重なり合う場所では、個人の投票行動は変わりにくい。

＜農村と都市の分裂？＞

インド系ウガンダ人の政治学者マフムド・マムダニは、名著『市民と臣民』（プリンストン UP）のなかで、植民地時代末期の歴史において、アフリカ社会が都市的な市民社会と農村的な慣習法の社会とに二極分解し、非和解的な対立に絡め取られていく構図を鮮やかに示した。普遍的で近代的な個人原理と伝統的で家父長的な共同体原理がアフリカ社会の内部に埋め込まれ、アフリカ人の心に内面化され、アフリカ人どうしが伝統と近代の戦いを演じるようになるのだ。

キリスト教の布教が進み、村の秩序が破壊されると同時に複雑に再編成されていくという、ナイジェリアのノーベル賞作家チヌア・アチェベが小説『崩れゆく絆』で描き出した構図もまた、このマムダニの問題意識と関連している。2001年、アフリカ通として知られる森喜朗総理が南アフリカの国会で演説した時には、アチェベの小説にまで話が及んで感心したことがある。

農村と都市では政治発展のペースが不均等である。共同体の論理を規範とする農村政治と、市民の論理を規範とする都市政治が衝突すると、社会に大きな緊張が生まれることになる。ヨウェリ・ムセベニ大統領のウガンダがそうであり、ロバート・ムガベ大統領のジンバブエもそうである。どちらの大統領も農村の支持を背景に首都の市民的言論を封殺し、独裁を続け、政治制度は劣化している。農村空間と都市空間の力が拮抗する南アフリカでは、社会の緊張はより大きい。

ズールー人の庶民の家庭に生まれた南アフリカのズマ大統領が農民の心がわかる政治家であることは間違いないが、一夫多妻をはじめとする彼の行動と価値観は多くの都市市民の生理的な反発を招いてきた。南アフリカの新聞では、フランスのシャルリー・エブドを思わせる筆致でズマ大統領を風刺する時事漫画がさかんに掲載される。これらを見て溜飲を下げるか、それとも自分が侮辱されたと感じるか。都市市民の投票行動の分界線はこのあたりと重なるように思う。都会で生まれ育った若者からすると、ズマのような男が南アフリカの国家元首を務めるのは恥ずかしいということになる。他方、ズマ大統領の支持者の側からすると、DAを支持する黒人は西洋かぶれの裏切り者ということになる。

<連立政治の時代>

今回の地方選挙を受けて、南アフリカのいくつかの大都市圏は政党の不安定な合従連衡の時代に入った。小政党や地方政党の動向にもよるが、反ANCの一点ではDAとEFFの連携による過半数獲得が自然であり、イデオロギー的にはANCとEFFの連携が自然だろう。地方自治体の連立の帰趨は国政の将来を占うものになるかもしれない。南アフリカの全国政治において、DAやEFFが単独で過半数を確保する状況は、少なくとも当面は考えにくい（両党の支持率はそれぞれ3割未満、1割未満にすぎない）。ANCが単独過半数を確保できなくなれば、いくつかの党が連立政権を樹立する以外に安定政権の選択肢はない。

連立の時代は、すべての政党にとって大きな試練となる。DAは白人政党時代の価値観を意識的に取り除き、黒人の心をつかまなければならない。EFFは最大限の要求を繰り返すのではなく、実行可能な政策の優先順位を考えなければならない。ANCは汚職を撲滅し、効率的なガバナンスを実現し、都市的な市民のロジックにも気を配らなければならない。それ

それぞれの政党が脱皮しなければ、権力へのアクセスを当然のものとして期待することはできない時代になってきた。選挙プロセスの公正さを信頼しているのは、オリンピックの試合を観戦するのと似たような興奮を感じながら、安心して開票作業を見守ることができる。このような実質的な民主化のプロセスがアフリカ大陸全域に広がることを期待したい。しかし同時に、「伝統と近代の内戦」によって、南アフリカ国家という容器そのものを壊してしまってはならない。これから数十年の南アフリカを見通すときに、筆者がいちばん懸念してしまうのが、この点だ。

今回、選挙結果をめぐる暴力事件は何も起きなかったが、開票期間中、南アフリカの警察は念のため全国で警備体制を敷いた。私も検問で止められた。ライバル政党の支持者の文化コードまで読み解きながら、冷静な政策論争を展開することができるだろうか。これから 2019 年の国政選挙の正念場に向かって、政党の責任は大きいと言わねばならない。

以上を踏まえ、本稿では、南アフリカの大統領選挙の背景、選挙プロセスの公正さを確保するための取り組み、そして選挙結果をめぐる暴力事件の発生とその背景について、筆者の経験をもとに考察する。また、南アフリカの選挙プロセスの公正さを確保するための取り組みについて、筆者の経験をもとに考察する。

南アフリカの大統領選挙は、2017年11月17日に実施された。この選挙は、南アフリカの大統領選挙史上、最も重要な選挙の一つとして知られている。この選挙の結果は、南アフリカの政治的将来に大きな影響を与えることになる。南アフリカの大統領選挙は、2017年11月17日に実施された。この選挙は、南アフリカの大統領選挙史上、最も重要な選挙の一つとして知られている。この選挙の結果は、南アフリカの政治的将来に大きな影響を与えることになる。

南アフリカの大統領選挙は、2017年11月17日に実施された。この選挙は、南アフリカの大統領選挙史上、最も重要な選挙の一つとして知られている。この選挙の結果は、南アフリカの政治的将来に大きな影響を与えることになる。南アフリカの大統領選挙は、2017年11月17日に実施された。この選挙は、南アフリカの大統領選挙史上、最も重要な選挙の一つとして知られている。この選挙の結果は、南アフリカの政治的将来に大きな影響を与えることになる。